タグ・ホイヤー、ふたつの革新モデル

100分の1秒から1000分の1秒という未知の領域に踏み込んだクロノグラフ

100分の1秒計測に続き1000分の1秒計測という未知の流域に踏み込む機構を発表したタグ・ホイヤー。メカニカル・クロノグラフの可能性を大きく引き出した、ふたつのモデルに迫る。

100分の1秒の計測を可能とした一体型クロノグラフ

「ホイヤー カレラ グラフ 1/100TH クロノグラフ」
自動巻き（クロノグラフは手巻き）。パワーリザーブ約42時間（クロノグラフは約90分）。18Kローズゴールド・ケース。アリゲーター・ストラップ。10気圧防水。ケース径43.5㎜。価格567万円（限定150個）

Cal.360は所謂モジュール式の2階建て構造だが、新ムーブメントでは駆動機構とクロノグラフ機構を一体化し、それぞれに独立した輪列、香箱、調速機を設けた。クロノグラフは毎時36万振動。

HEUER
CARRERA MIKROGRAPH
1/100th of a Second Chronograph

それにしてもタグ・ホイヤーの躍進の速度はすさまじい。100分の1秒計測を可能とした「ホイヤー カレラ マイクログラフ 1／100th クロノグラフ」（以下、1／100）を今年1月のプレ・バーゼルで発表するや、その余韻も冷めぬ3月のバーゼルワールドでは、1000分の1秒計測が可能な「マイクロタイマー フライング 1000 コンセプトクロノグラフ」（以下、1／1000）をお披露目した。これらのクロノグラフを開発したのが、同社バイス・プレジデントとR&Dの責任者を兼ねるギィ・セモン氏だ。プロフィールの通り、氏は2004年に外部のスタッフとして「V4」のムーブメントを完成に導き、'08年にタグ・ホイヤー加入。そして、手がけたのが磁気振動による「ペンデュラム」と「1／100」だった。

ところでタグ・ホイヤーといえば、同じく1／100秒を計測できる2005年の「キャリバー360 クロノグラフ」が知られるが、「1／100」とはまったく構造が異なっている。それは「360」がベース・ムーブメントにクロノグラフモジュールを追加した2階建てだったのに対して、「1／100」はクロノグラフと駆動輪列を一体化。加えて、輪列構造を見直すことによって、クロノグラフの伝達効率も大幅に改善したのである。

そして「1／100」の経験を踏まえて、さらにステップアップしたのが「1／1000」だった。通常、振動数を上げるには太くて硬いヒゲゼンマイが必要になるが、慣性モーメントは低く抑えなければならない。そこでテンプを排除してアルミ製のスタビライザーを設け、クロノグラフを瞬時に制御するランチャー・システム（ハートカムの役割）を加えることによって、360万振動に耐えうる脱進機の開発に成功した。しかも、アンクルの爪石にタングステン素材、ガンギには先端が傾斜したインボリュート歯型を用いることで、オイルフリーも実現したのである。

取材時の「1／1000」は、クロノグラフの駆動時間が150秒ほど。これについてセモン氏は次のように語っている。

「駆動時間を延ばすことは簡単ですが、市場から早く実用化してほしいとの要望が強くあります。ですから、この形のまま年内には販売を開始するでしょう」

その言葉の通り、本国ではすでに発売を開始し、先頃「ジュネーブ・ウオッチ・グランプリ」のスポーツ・ウオッチ部門で、最優秀賞受賞の知らせが届いた。

毎時360万振動を実現したクロノグラフ

「マイクログラフ1/100TH」と同様に駆動系統とクロノグラフ系統をセパレートした輪列構造となっている。クロノグラフは360万振動。

「マイクロタイマー フライング 1000 クロノグラフ」
文字盤センターに150秒計（白い針）と1/000秒計（黄色い針）を搭載し、スモール文字盤で1/10秒を計測。裏蓋からはブラック・ルテニウムでコーティングされたムーブメントを見ることができる。自動巻き。パワーリザーブ約42時間（クロノグラフは約150秒）。手巻き。チタン・ケース。2011年冬発売。予価12万スイスフラン。

TAG HEUER
MIKROTIMER Flying 1000

タグ・ホイヤーのバイス・プレジデントとしてR&D部門の最高責任者を務めるギィ・セモン氏。フランス海軍、フランシュコンテ大学、フランス研究省を経て民間の工学設計事務所に入社。その後、フライトシュミレーション会社の経営や独立コンサルタントとして活動し、2004年には「V4」の開発に携わる。2008年、タグ・ホイヤーに入社。

80周年を迎えた〝レベルソ〟ジャガー・ルクルト〝レベルソ・ミニッツリピーター・リドー〟

ジャガー・ルクルトの象徴的モデル〝レベルソ〟は誕生60周年を迎えた1991年からケースの両面を利用する、という新たな試みに挑戦している。近年の複雑機構開発の技術力を示したミニッツリピーター・リドーの詳細を解説。また、2000年以降の複雑モデルと宝飾モデルをみてみたい。

レベルソの誕生80周年の節目にあたる2011年のジュネーヴ・サロンでは、これぞとばかりに様々な新型レベルソが登場した。この中で、最高峰にあたるのが75個の限定生産がなされるミニットリピーターのリドーである。その特徴はケース前面に開閉式のシャッター（リドーとはフランス語でブラインドやシャッター、カーテンの意）を装備していることで、通常のスライダーではなく、これを動かすことによってリピーター機構が作動するユニークで魅力的な仕組みをもつ。

しかし、この種の超複雑時計の例に洩れず、リドーの発表から発売までにはいささか長めのタイムラグが存在しており、実際に完成品がお目見えするまでにはまだ多少の時間が掛かるようだ。従って、ひと足先に採り上げたモデルは初期のブラス・ケースを経て、実機と同じ18Kホワイトゴールドをまとった2番目のプロトタイプである。むろん、この後もいくばくかの改良が加えられてゆくはずだが、ここでは各部をざっと紹介してゆこう。

リピーター機構を装備したレベルソとしては、1994年に500個の限定生産がなされた初代ミニッツリピーター以来、約17年振りに製作されるリドーだが、その当時と較べると時代背景は大きく異なるものだ。即ち、この間に球体トゥールビヨンにはじまり、各種ミニットリピーターやグランソヌリと言った数多くのグランド・コンプリケーションの開発で技術力を飛躍的に高めたジャガー・ルクルトが、満を持して発表したのがリドーという訳である。

音質と音量を高めるため、さらにシャッターを作動させるためのギア・トレーン一式を装備したケースは、グランド・レベルソよりもふたまわりほど大きな縦55㎜×横36㎜×厚さ12㎜のサイズが採用された。これとともに、複雑機構を満載した2006年のトリプティック同様、重くなった反転ケースが不用意に動かないよう保持するための安全機構が取り付けられるいっぽう、近年のミニットリピーターでは標準装備ともいえる日常生活防水機能も新たにつけ加えられた。

この大型ケースに搭載されるのは新開発のCal.944である。いささか乱暴な言い方をすれば、この手巻き式のCal.944は、これまでに培ってきたミニットリピーター技術を、それまでの丸形から長方形に置き換えたものと言えるだろう。まず、リピーターの打音を制御するガバナーには、これまでどおりルビーを配したサイレント・レギュレーターが使われており、不快なガバナー音は殆ど聞き取ることができない。また、リピーターにとって最重要なハンマー&ゴングは形状が変化しているものの、これまでどおり効率の良いスクエア構造に、可動式アームと特殊ジョイントを組み合わせた改良型トレビシュ・ハンマーを装備する。ただし、ジャガー・ルクルトの特許である〝クリスタル・ゴング〟――音響効果を高めるためにゴングの末端をサファイア・クリスタルにレーザー溶接する――システムは、おそらくシャッターとの〝反響音〟の干渉を避けるためなのだろうか、今回のリドーには採用されていない。

いっぽう、Cal.944を薄く仕上げるため、時計部分にはジャガー・ルクルトのムーブメント中でももっとも薄い1.85㎜のCal.839／849が組み合わされた。秒針を装備しない時分のみの2針式で、パワーリザーブ量が35時間と比較的少なめなのは、このためである。

さて、肝心要ともいえるミニットリピーターの一連の作動だが、①16枚のストラットで校正されるシャッターを手で開ける、②これと同時にリピーター用のバレルが巻き上げられ、さらに③シャッターをいっぱいに開いて手を離したときに機構がスタートし、④チャイムが鳴る仕組みである。なお、リピーターが〝時〟に続いて〝クォーター分〟、さらに〝残りの分〟を奏でる間にシャッターは再び元のポジションへと、ゆっくりと閉まってゆく。ジャガー・ルクルトではこの優雅な動きを「オペラ劇場における幕」と謳っているが、あながち大袈裟な表現ではないことをつけ加えておきたい。

Photo/Yoshihisa Kumagai(WPP)　Text/Hiromu Takizawa

16枚で構成されるシャッター。手で開く際にリピーター用のバレルが巻かれ、手を放すとシャッターが閉じながらチャイムを奏でる仕組み。プロトタイプゆえ、その音質は調音する前の段階。

ケースの裏面ダイアル。同じくブルードスチールによる時分のみの表示で、1000時間テストを受けたCal.944は35石、2万1600振動、パワーリザーブ約35時間のスペックをもつ。2012年春の発売予定で、価格は23万ユーロ。

ミニッツリピーター・リドーの表面ダイアル。表示はブルードスチール針による時分のみで、カット・オフ・ダイアルの四隅に角形のゴングが見える。リュウズの下の突起は、反転ケースの安全装置。

ムーブメントの裏側で、モディファイを受けたゴングとハンマーの形状などミニットリピーターの構造が見える。6時位置がリピーター用のバレルで、その右側が2枚のウィングにプラチナを採用したサイレント・レギュレーター。

ブルガリ レディース・ウオッチ

時計に表現されたジュエラーの個性

ブルガリは2010年に「ウォッチメーカー宣言」をし、時計製造への意欲を示した。そして男性に向けた機械式時計を充実させる一方、ジュエラーの創造と技術を生かした女性モデルにも力が注がれている。レギュラー・モデルからハイジュエリー・モデルまで、新作をみてみたい。

「ブルガリ セルペンティ」。クオーツ。リュウズにはカボション・カットのピンク・ルベライトをセットする。
右／2連のステンレススチール・ブレスレットにダイヤモンドをセットしたケース。価格99万7500円。
左／2連の18Kイエローゴールド・ブレスレットにダイヤモンドをセットしたケース。価格322万3500円

ヘビはブルガリの代表的なモチーフのひとつとして知られる。1940年代にはゴールドやステンレススチールなどのトゥボガス・ブレスレットにヘビの頭を模したケースを付けた、さまざまなデザインのブレスレット・ウオッチが誕生し、ムーブメントはオーデマ ピゲ、モバド、ジャガー・ルクルトなどが搭載されていた。その後、'60年代になると、ヘビのモチーフは下の写真にあるような写実的なものとなり、ゴールドのブレスレットに貴石や半貴石をセットし、あるいはエナメルで彩色した華やかなブレスレット・ウオッチが登場した。ヘビの胴体部分は金箔から鱗を1枚1枚作り、それを純金のピンで留めるという手法で作られ、また内側のホワイトゴールド製のバネがブレスレットに伸縮性をもたらした。

このブレスレットの製法はジュエラーが培った技術だが、同様にブルガリの代名詞ともなっているトゥボガスも伝統的な宝飾の技法に則っている。チューブを意味するトゥボガスの製法は19世紀後半に開発された。銅や木製の円柱の周囲に2本のメタルのバンドの縁をぴったりと合わせて巻きつけ、最後に円柱を取り除くと螺旋状のバンドができるというものだ。手首をひと巻きする長さを作るためには、5メートルの金属が必要という。'40年代まで多くのジュエラーが用いたが、一時、途絶え、'70年代にブルガリがふたたびリング、ブレスレット、ネックレスなどでトゥボガスを復活させた。

さて昨年、ブルガリはブランドのふたつのアイコン的存在、すなわちヘビのモチーフとトゥボガスを組み合わせたレディース・ウオッチ「セルペンティ」を発表した。そして、今年はそのバリエーションとして1連あるいは2連の18Kイエローゴールド・タイプと2連のステンレススチール・タイプを加えた。また過去の作品から発想を得た、より複雑な技法を駆使したハイジュエリー・ピースの製作も行われ、ジュエラーの矜持を示している。

1960年代には「ヘビ」を写実的なモチーフとする多くのジュエリー・ウオッチが製作された。ゴールドにエナメルあるいはカラーストーンで色のアクセントを加えた作品は、ブルガリの創造性とジュエラーの技術を示すものとして高く評価されている。

「セルペンティ」。過去のモチーフを現代に甦らせたハイジュエリー・ウオッチ。18Kホワイトゴールドのブレスレットにダイヤモンド、エメラルド、アメシストをセットし、目はサファイア。ブレスレットは伸縮性に富み、手首にフィットし、また着脱もたやすい。クオーツ。価格3391万5000円

ブライトリング・コーポレイト イベント2011

ブライトリングの真髄を知る

有意義な飛行体験

今年も7月初旬、2週間にわたって開催された、
“ブライトリング・コーポレイトイベント2011”。
これは世界中のプレスやリテイラーがブライトリングと航空界の絆を
自身の肌で知ることのできる貴重な飛行体験イベントである。

上はフランス空軍アクロバット・チーム「パトレイユ・ド・フランス」の12名の元パイロットと7機のチェコ製ジェット機L-39Cアルバトロスによって編成される「ブライトリング・ジェットチーム」。下は小型複葉機によるエアロバティックス・チーム「ブライトリング・エンジェルズ」。

地上3500mからのスカイダイビングや双発ヘリコプターMDエクスプローラーの搭乗、1930年代製造のベントレー試乗体験など、イベントでは日常とかけ離れたさまざまなアトラクションが用意された。

複葉機の翼上に支柱を設け、そこに身体をハーネスで固定して飛行するのが、「ブライトリング・ウイングウォーカー」。時速150マイルというスリル溢れる飛行が体験できる。

Photo/Kazuyuki Takahashi　Text/Masaaki Ono(WPP)

BREITLING CORPORATE EVENT 2011

一糸乱れぬアクロバット飛行で観客を魅了したのが「ブライトリング・ジェットチーム」。
深みのあるグレーの機体にブライトリングの黄色いロゴが美しく映える。

BREITLING JET TEAM